



二代目吉田玉造について

吉 永 孝 雄

文樂座の東側佐野屋橋の通りを真直ぐに二三丁南へ行くと西側に所謂八幡筋に面して八幡さんがあります。手をオーバのポケットから出して帽子を取つてふと見ると桃割の娘さんが一人兩手を合はせて何か祈つてゐる。その八幡宮から少し南へ行くと道頓堀の川に出る一寸手前に大和屋といふ見た所大きな料理屋が左側にあつて、そこを東へ折れると南側道筋に出ばつてゐる交番所の向ひ、大和屋の東隣に格子かこひになつたさゝやかな家があつて津田豊吉といふ標札がかゝつてゐます。こゝが文樂座に六十餘年の長い年月致々として勤めて居られる現在衣裳部の主任の吉田玉七老人のお住家なのです。玉七老人の實兄は人も知る明治期の人形遣の名手二代目吉田玉造なので私は是非その話を聞きたいものと心をはづませて十二月の上旬訪ねたのでした。がらくと戸をあけて

「お師匠さんはおいでですか」と大きな聲で尋ねると當の玉七さんがにこ／＼して出て來られる。一度齋藤先生のお伴を

してうかがつた事があるので覺えて居られて「おいでやす、さあどうぞお上り」と言つて頂いてすぐに次の間の火鉢の側に座を占める。尋ねて來た私と同じやうにいそ／＼と迎へて貰つて本當にいゝ老人だなあと田舎の祖父にでも久しぶりで逢つたやうな氣持で二代目玉助さん即ち二代目玉造さんのお話をして頂く。

「さいですな。えゝつとあれはたしか慶應三年の生れやと思ひますが。」と一寸心の中で勘定をして居られるやうであつた私の調査では二年の筈であるが話の途中で口をはざんで軽い氣持で言つて頂けなくなると大變だと黙つて聞いて居る。「もう古い事でさつぱり覺えとりませんが、わかつとりますことならお話させて貰ひます」と一寸不安さうに、然し又一方今は亡き兄さんを思ひ出してなつかしさうに目をしばたゝかれます。

「兄は津田源吉と申しました。まだその上にもう一人兄が居

りましたが、名前は清吉と言ひましたが早く亡くなりましたそれから私とその外に姉妹もありました。父は津田藤吉と申しまして、えゝさいです。それで兄弟皆、吉がついとります。父は新町で大きな酒屋をしてました本家の津田武兵衛方で番頭のやうな事をして居りました。

兄が芝居へ出ましたのが九つの年で初代吉田玉助さんの弟子になつて吉田玉七と言ひました。初代の玉助さんは有名な初代の大玉造さんの息子さんでなか／＼の名人で今の文五郎さんもお弟子さんでござりました。しかし外の方様と違つて兄はもう文藝一點張り一度も外の芝居へ出たことはありませんだ。」

「十二の時先代の小兵吉さん、この方は後に四代目吉田兵吉さんになられました、その方の親御さんで文藝の頭取をして居られた吉田千柳さんの所へ養子にゆきました。吉田兵吉さんは本名をまさき辨吉と申されますがこの方のついで。こゝで私は三宅氏の文藝人形物語に本名佐々木熊次郎とあるのを思ひ出して口を入れて「えゝまさきですか。佐々木と違ひますか」と聞き返したが耳が遠くて通じないのでしつこい訊ね方であつたがこゝでは是非はつきりしなければならぬと思つて知らぬ人が聞くやうに喧嘩でもしてゐるやうな大きな聲で「齋藤先生が玉七さんの所にゆくなら御飯々澤山たべて行きなさいよとてもおなががすくし、疲れるからと注意をうけたので

その點準備は満點——繰り返して尋ねたら玉七さんの奥さんも出て來られて「あんたそりや佐々木さんぢやをませんか」と言はれると玉七さんは「いゝや、兵吉さんは木偏に正直の正の字を書いて柁その下に木、柁木と云ひます。兄は兵吉さんの母方の名をついだのでそこが佐々木で佐々木熊次郎と申しました。まあその兵吉さんのつては兵吉さんのお父つあん吉田千柳さんのおかみさんの佐々木の家をついだのでをます。」

「兄は大人しい物言はずで——それをかきな事には子供の時は女の子の風をしてましたのや。」とさをもかしさに顔を綻ばされる。「えゝ人に逆らうたり喧嘩したりすること滅多にござりませなんだ。それに至つて親孝行でして、死なれた時にはその事が毎日新聞に大きく出ましてな、その新聞は齋藤先生が確か持つてやります。」（私のその後二三日して齋藤先生のお宅に馳けつけてその新聞を拜借したので、最後に餘白があつたら全文を轉載したい。私は三宅氏の二代玉造について書かれたものゝ中に濃厚、篤實な一點の濁りのない英國流の紳士——英國を相手に血みどろの戦をつづけてゐる今日ではもうかうは言へなくなつたが——謙遜家で禮儀常識の至れりつくせりで、紋十郎が好んで自分を語つたがると正反對に殆んで自家の説など述べなかつた、人に約束して間違なく、責任感あり、清廉で几帳面で汽車の發着時間のやうに狂

ひがないとほめ詞を思ひ出した。

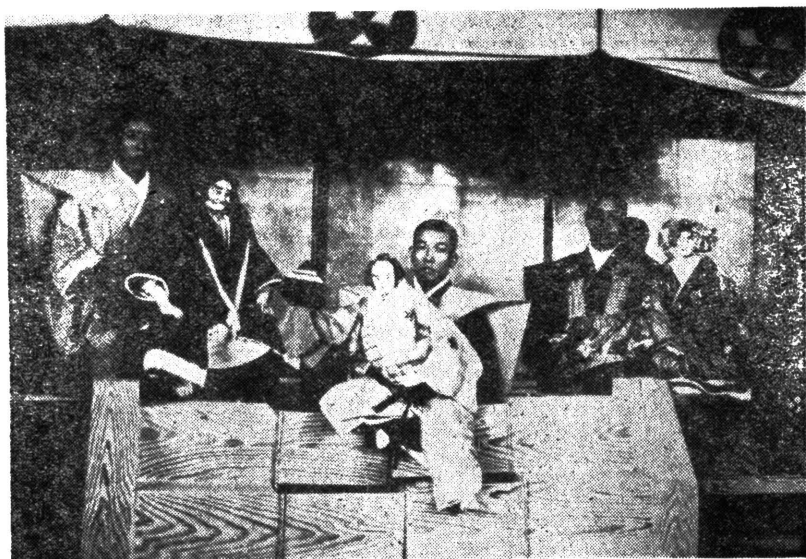
「信仰記の子役の輝若丸が初舞臺だと聞いてをりますが、師匠の玉助さんが十九年に死なれてその遺言で明治廿二年三月二代目玉助をお三輪で襲名披露したと覚えて居ります。」

こゝで一寸玉七さんのお話を中断しなければならぬ、それは石割先生が近世演劇雑考の勾欄雑考の中で「明治期に入つて玉造系統だけでも今日はつきりしておかぬとどうも怪しくなるやうだ。既に玉助が二人ある事すらもう世間では忘れてゐるやうだから」と書かれて「初代の玉造は七十二才で明治卅七年十一月に死んだ。玉造の實子玉助が明治卅九年三月に二代目玉造をついだ。玉助の弟子の玉七が二代玉助を繼いだ。初代玉助の弟子の玉松が三代目玉造を繼いだ。二代目未亡人の苦情で三代玉造を返して改めて玉藏を名乗つた。これがこの間死んだ玉藏だ。この玉藏の弟子が現在では玉松が筆頭門弟となつてゐる。そして現在の玉次郎は二代玉造の弟子、又今の文五郎はこの初代玉助の弟子といふ系統が今現在の玉筋の系統で座頭の榮三は定まつた師匠がなかつた」と書いて居られるのが吉田榮三自傳等と違ふので今日の目的の一つはこの點を是非とはつきりしたいと考へた爲でこの點を確めると「それは間違つてをります。兄の二代玉助が明治廿九年三月攝津大掾さんの廿四孝の十種香の八重垣姫で二代玉造の襲名披露をしましたのでございます。その寫眞も確かあつた

と思つて居ります。」と粗末な古い小さな寫眞帖を見せられたが、「皆、人が一枚くれ、一枚くれと言つて持つて行かれて今手元に何にも残つて居りません」と言はれる通り唯一枚その寫眞があるだけで——三宅氏の文樂人形物語にもあつたのとは違つてゐたやうに思ふ。——あとは玉七さんの舞臺寫眞が五六枚と玉七さんの家族の寫眞だけであちらこちらに判いだあとが見られた。

「親玉さんの息子さんの初代玉助さんは明治十九年の七月にコレラでなくなられましたからそんな苦はございません。初代の玉助さんはなか／＼よう遣はれまして親の玉造さんよりうまいと評判の方でしたが兄はこの初代の玉助さんの弟子でさつきも申しましたやうに玉助さんがなくなられて二代目の玉助をつぎ後親の玉造となりましたのでございます。」

「兄はほんとに弟思ひで私達を可愛がつてくれました。父が五十二の時、丁度私の十三の時やつたと思ひますが亡くなりましたので親代りになつてくれました。兄の好きな物？ え、さいですな、天ぶらが大好きでした。何でも食べましたけれど。え、物言はずでして芝居でも家でもどこへ行つてもいらんことは言はぬ人でして。」と又しても亡き兄を思ひ出しては同じことを話される。私は文樂人形物語に「玉助さんは沈黙家だつたけれど奥さんが口八丁、手八丁で吃又の女房お徳さん見たいな人だ」と書いてあつたのを思ひ出してぶしつけにも



竹中砦の段 千里先代紋十郎・犬清・三兵衛・二世玉造

その事を言ふと流石の玉七さんも思はず笑はれて「そりや後のよめの事やと思ひます。先のよめは、森しげ子と言つて有名な名古屋の森林兵衛といふ方の娘さんでした。それ／＼あの藝人の好きなあさいの、まんきんこうを製造してゐる家で」——と言はれても一向わからないのでどんな食べものですかと聞き返すと玉七さんは立上つて引出しから一枚の膏藥を持つて來られた。見ると淺井万金膏とある。私は自分ながらをかしくなつてその効能書を読んでゐると玉七さんは、

「森蘭丸の子孫でお嫁さんに來やはつた時は鶴の丸の紋の這入つた懷劍など持つてやりました。」と晴々しく名家の嫁を迎へた當時をなつかしく追想される。後のよめがちかと云うて前の方と違つて一寸しつかりもので口達者な方でした。吃又の女房みたいと言ふて、そりやそんな事ありませんけれど」と笑はれる。

「兄の得意なものですか、え、ボケヤツシ（若男）それから檢非違使もの、孔明ものです。妹背山の雛鳥や岩根御前もお客さんが感心しやりましたけれどお山はあまり遣ひませんでした當り後は知盛とか治兵衛とか忠兵衛とか伊賀越の重兵衛とか菅相丞様で能の間の盛や重兵衛の印籠置いて立つてゆく所や忠兵衛の封印を切る所など特によかつたと覺えて居ます。彌作も大當りでどーら拍手をうけました。」

これは榮三自傳にも「三十九年一月先代大隅さんの鎌腹で

これは又おはこもので七太夫を殺したあとのもう叶はぬ／＼など實際悲壯そのものでした。文樂座上演はこの時が最初で従つて玉助さんの彌作も初役でしたが大隅さんの淨瑠璃につれて必死になつて遣つて居られました、それに紋十郎さんの七太夫がとても物凄いいものでした。」とある。

「兄は玉造になつてから間もなく四十二年になくなりました」と言はれたがこれは後に新聞が明記するやうに四十年四十二才でなくなられたのを混同して居られるに違ひない。私はこゝで齋藤先生から頂いた木下蔭狭間合戦の竹中碧の舞臺寫眞をお見せすると、「えらい古いもの持つて居られますな。

それ、これが兄で官兵衛を遣うてゐます。この千里は紋十郎さんで犬清を遣うて居られますのが榮三さんです。たしか明治三十」と考へて居られるので「三十八年四月の時で舞臺寫眞が新聞に出た最初のものださうですね。」と言ふと「榮三さんもえろゝ若うますな。この兄の遣うてゐる官兵衛といふ人は齋藤義龍の家來でどらきかぬ氣の男でこの犬清は信長の家來で官兵衛の娘の千里に、えい」とそばの子供さんを「寸見られて」惚れましてな、逢ひに來ます。それ／＼後千里に子が生まれますがその子を久吉がせたらうて戦場に出ます。こゝは千里に逢ひに來た所を官兵衛に見つかつて犬清が笠印を見せて春長の味方になれと言つてゐる所です。えい芝居ですが近頃やる人がありません。私は更に重兵衛が印籠を置い

てゆく時どんな型をされたのか、どんな所がよかつたのかと追求したが「あ何しろよい事で」と言ひ乍ら思ひ出さうとして居られるが浮んで來ないらしい。私は玉七さんが何か素晴らしい型でも見せて下さる事と期待してゐたがその期待は残念にも裏切られた。これは第一線を退かれた玉七さんにとつてみれば突然訊ねられては答へられぬのが當然かも知れない。しかしこゝに玉七さんがこの道に大きな足跡を残されなかつた理由の一つを見つけ出した。それで讀者の爲に初代玉造、二代玉助の型の残された唯一のものとして考へる明治卅六年九月の歌舞伎四十號につてゐる壺阪寺の型の一節をこゝに再録して二代玉造さんを偲ぶこととして纏りのないこの文を終りたい。

「聞くにお里は身も世もあられず、縋り附いて」でお里は澤市に縋り、「エ、そりや胴慾な澤市さん、いかに賤しい私ぢや、連、現在お前を振捨てゝ外に男を持つ様な、そんな女子と思ふてか、そりや聞えませぬ／＼エ、聞へませぬわいなあ」で右の袖を顔に當てゝ泣伏し「も、とゝさんや、かゝさんに別れてから」で下手へ來て「伯父さんのお世話になり、お前と一所に育つられ、三つ違の兄さん」とで右の指で數へ「云ふて暮して居る内に、情なやこなさんは」で上手へ寄り「生れも附かぬ抱瘡に、目かいの見えぬ其上に、貧苦にせまれどなんのその」で、兩袖を交る交る寄せて自分の姿を眺め「一

且、殿御の澤市さん」で澤市を見上げ、「たとへ火の中水の底」で離れ、兩手の人差指を交る／＼出して火の中と水の底の心持を分け、「未來までも夫婦ぢやと」で傍へ寄り「思ふばかりか」で膝に縋り、「これ申し」で顔を見上げ、「お前のお目を直さんと」で下手へ来て「この壺阪の観音様へ」で右の手を出して観音様の方へ見當を附け「明けの七つの鐘を聞き」で空を見て「そつと」で上手向になり、「拔出で只一人」で「チウテン」(兩手を突出して掌を上へ反す形)をして、忍び出る振を見せ、「山路脈はず三年越」で、右の手で山を教へて(山の形を二度畫く)澤市の方に寄り、「切なる願に御利生の」でその手で拜み、「ないとはいかなる報ぞ」で手拭を持ちて咬へ身をねぢて泣き落す。「観音様も聞えぬと、今の今まで恨んで居た」上手を向き、手を膝に突き、「私の心も知らずして」で傍に寄り、「外に男が」で上手から奥を見て、「あるやうに」の間に手拭で二度澤市の肩を軽く打ち、「今のお前の一言が私は腹がたつわいな」で澤市の膝に手を掛けて泣伏し「おやおお、おとおおお」と盛込む節に合せて足拍子をさせながら下手へ来て、「口説き立てたる貞節の涙の色ぞ誠なり」で坐つて左の足を立膝にし、顔を下手向に仰向け兩手で手拭を抜く様に持つて眼に當て、その手拭をその儘下して口に啣へて泣く。「始めて聞きし妻の誠、今更何と澤市が」で體を乗り出し、「詫の詞も涙聲」で左の片膝を立て、「あゝこれ女房共、

何にも云はぬ、勘忍してたも」で右の手を出して拜み、「誤つた／＼わいのう」で右の袖を下から顔に當てゝ泣伏し、「もう、さうとは知らず、不具の癖に愚痴ばかり、これ堪へてたもれとばかりにて」で、お里を探る心で拜み、「手を合したる詫涙」でお里の肩に手を掛け「袖や袂をひたすらん」で後へ下り手を合せるが、こゝで澤市の着附の肩が自然に下り黒襟の掛つた桃色の襦袢がほの見える。

●吉田玉造逝く

文樂座人形遣ひの座頭

御靈文樂座人形遣ひの座頭として桐竹紋十郎と共にその重鎮たりし吉田玉造はかねて肺を患ひ療養中なりしが昨日正午十二時遂に不歸の客となれり。文樂座人形遣ひの寂寥を思ふと共に轉た藝壇のために愛情に堪へざる心地す。同人は幼名を津田源吉と呼び西區新町北通二丁目醬油商通稱鉄武事津田武兵衛方の雇人某の實子なるが幼年の頃より人形を遣ふ事を好み九才にして初めて故玉助(故玉造の倅)の門人となりて玉七と名乗り居りしが、或る事件のためこれも故人吉田千柳(當今の吉田兵吉の實父)事佐々木某の養子となりて佐々木熊次郎と本名を改め明治十八年には師匠と共に東京猿若町に新設したる文樂座に出動し技ます／＼進み歸阪後翌十九年七月師の玉助死亡後廿二年三月に至り師